

アブサロムの反逆と神の懲らしめ

真の悔い改めとは、罪の赦しを求めることだけでなく、懲らしめと結果も、神の恵みとして受け入れることである

ダビデの生涯において、三男アブサロム（サムエル下 3 : 3）の反逆は最も深い悲劇であった。その背景には、ダビデ自身の罪（11:2～4、6～13、12 : 9）と、それに対する神の宣告があった。預言者ナタンは、「その主があなたの罪を取り去られる。あなたは死の罰を免れる The LORD also hath put away thy sin; thou shalt not die」（12:13）と罪の赦しを告げた一方で、「剣はとこしえにあなたの家を去らない」（12:10）とも語った。さらにダビデが語った「小羊の償いに四倍の価を払うべきだ」（12:6）という言葉は、やがて彼自身の家に成就していくことになる。

ダビデの長男アムノン（3 : 2）は異母妹タマルを辱めた（13:14）。しかしダビデはこれを知りながら、彼を罰することができなかった（13:21→怒るだけで、「処罰した」とは記されていない）。自ら犯した罪が彼の道徳的権威を著しく弱めていたのである。その結果、タマルの兄アブサロム（三男）は二年の時を経て復讐を企て、異母妹タマルを辱めた（13:14）アムノンを殺害した（13:28～29）。ダビデがアムノンの罪を正しく処理しなかったことが、さらなる流血を招いたのであった。

やがてアブサロムは民衆の心を巧みにつかみ、「イスラエルの人々の心を盗み取った」（15:6）。彼は誓願を果たすと称してヘブロンに赴き（15:7～9）、密かに支持を広げる。さらにダビデの助言者（顧問）であるギロ人アヒトフェルまでも味方につけた（15:12）。こうして反逆は国家存亡の危機へと発展する。

この知らせを受けたダビデは、エルサレムを戦火から守るため都を去る決断をする（15:14）。祭司たちが神の箱を運び出そうとしたとき、彼はそれを都へ戻させ、「もしわたしが主の前に恵みを得るならば、主はわたしを連れ帰って、わたしにその箱とそのすまいとを見させてくださるであろう。しかしもし主が、『わたしはおまえを喜ばない』とそう言われるのであれば、どうぞ主が良しと思われることをわたしにしてください。わたしはここにおります」（15:25～26）と語った。そこには、懲らしめをも受け入れるダビデの真の悔い改めの信仰があった。

オリーブ山を泣きながら登るダビデ（15:30）の姿は、王でありながら深いへりくだりを示している。さらにシメイに石を投げられ、ののしられたときも、彼は報復を禁じ、「主がダビデを呪えとお命じになったのであの男は呪っているのだろうから」（16:10）と受け止めた。そして「主がわたしの苦しみを御覧になり、今日の彼の呪いに代えて幸いを返してくださるかもしれない」（16:12）と語った。ここに、裁きの中にも憐れみを期待するダビデの信仰を見ることができる。

戦いの末、アブサロムは命を落とす（18:14～15）。その報を聞いたダビデは、「わたしの息子アブサロムよ、わたしの息子よ。わたしの息子アブサロムよ、わたしがお前に代わって死ねばよかった」（19:1、口語訳 18 : 33）と嘆いた。この叫びは、罪がもたらす悲劇の深刻さを物語っている。

しかしこの一連の出来事は、ダビデを滅ぼすためではなかった。神は「しかし、彼の子らがわたしの教えを捨て／わたしの裁きによって歩まず／わたしの掟を破り／わたしの戒めを守らないならば／彼らの背きに対しては杖を／悪に対しては疫病を罰として下す」（詩編 89 : 31～33）と約束された。罪には結果が伴うが、悔い改める者を神は見捨てられないのである。

アブサロムの反逆は、罪の連鎖とその重い刈り取りを示すと時に、神の義と憐れみを明らかにする出来事であった。ダビデは懲らしめの中でへりくだり、なお神に望みを置いた。その姿は、裁きの中にも恵みが流れているという聖書の真理を、今も私たちに語り続けています。

聖書においてダビデは、単なる歴史上の王ではなく、来るべきメシアを指し示す型として描かれている。ダビデは、罪ある王として、真の悔い改めに生きた者であり、その苦難の姿は、やがて来る罪なき王キリストを指し示す影であった。ダビデが「代わって死ねばよかった」と叫んだその願いに、キリストは「成し遂げられた」（ヨハネによる福音書 19:30）と応えてくださったのである。